

地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実

- 【研究代表者】谷尻 治 (和歌山大学教職大学院)
【共同研究者】貴志年秀 (和歌山大学教職大学院)
矢出大介 (和歌山大学教育学部附属小学校)
早崎大輔 (和歌山市立有功東小学校)
中山雄一郎 (和歌山市立有功東小学校)
中山義之 (和歌山市立加太小学校)
藪 隆政 (和歌山市立雑賀小学校)
赤松広志 (和歌山市立雑賀小学校)
細田和希 (和歌山市立雑賀小学校)

1. 実践研究課題について

『地域の「ひと・もの・こと」を活用した総合的な学習の時間の充実』

昨年度に引き続き、上記の研究課題を設定し実践的研究を進めてきた。平成 12 年度（2000 年度）に導入された「総合的な学習の時間」の原点に戻りつつ、「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができる」（平成 29 年学習指導要領）ことを目指した実践を創造し、さらに和歌山全体へと発信することが重要であると認識して、共同研究を立ち上げた。児童にとって地域の「ひと」との出会いが特に重要であり、人との出会いを通して、地域を知り地域を見直し地域を愛する態度が育成されることを共同研究協議会で確認した。今年度は共同研究者があらたに 3 名加わり、生活科も含め小学校 6 年間の学びを見通した指導のあり方も研究対象としている。共同研究メンバーによる公開授業が行われる前には、独自に指導案の検討会を持ち、ねらいに沿った授業づくりが展開できるよう協議を重ねている。

2. 今年度の活動

共同研究メンバーの「生活科・総合的な学習の時間」に関連する主な活動は次の通りである。

(1) 共同研究協議会 *随時

共同研究メンバーが所属する各校と各自の「総合的な学習の時間」の計画や意見の交流

(2) 公開授業研究会開催時の相互参観・協議会参加等

* 下線は授業者、下線なしは発表者または助言者。参加者は省略

- 6 月 26 日 和歌山立有功東小学校にて開催の現職教育授業研修（中山雄・貴志・谷尻）
8 月 9 日 生活科・総合教育研究会開催の「夏季研修」・実践発表（藪）
10 月 9 日 附属小学校にて開催の現職教育授業研修（矢出・谷尻）
10 月 23 日 和歌山市立有功東小学校にて開催の「生活科・総合的な学習の時間 研究発表会」・公開授業（早崎）
11 月 3 日 附属小学校にて開催の「教育研究発表会」・公開授業（矢出・谷尻・貴志）
11 月 26 日 和歌山市立加太小学校にて開催の「共同研究」・公開授業（中山義・貴志）
2 月 28 日 和歌山市立雑賀小学校にて開催の「共同研究」他・公開授業（細田）

(3) 現職教育講演

- 8 月 28 日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育研修（谷尻）

(4) 講演会

- 2 月 8 日 和歌山大学にて石堂裕氏講演会開催。今年度の実践を 3 名が発表（中山義・赤松・矢出）

3. 共同研究者実践概要

単元名『つながれ笑顔 和歌山とラオス』

実践者：矢出大介（和歌山大学教育学部附属小学校5年A組）

「つながれ笑顔 和歌山とラオス」で、子どもの自己肯定感と自己有用感を高めることを最も大切にした。

子どもたちは、環境問題を学んだ上で、発展途上国で働いていた人たちとの対話やSDGsカードゲームをすることを通して、日本と発展途上国の生活の違いや様々な子とが繋がっていることを感じてきた。そして、子どもたちが、「ラオスでは飲み水を手に入れることが困難であること」を問題と捉えた。その問題の解決策を考えて、残食0を呼びかけたり、牛乳パックをリサイクルしたり、募金活動を行い、集めたお金でラオスに井戸を掘る資金とした。

今年度はこれまで以上にカリキュラム・デザインを大切にした。社会科「暖かい土地の暮らし」「これからの食料生産」、道徳「もし世界が100人の村だったら」で学んだ、世界の現状などが本単元の問題解決に知識を補完するかたちで活用される。本単元で探究的に学んだことを表現・発信する段階で、国語科「グラフや表を用いて書こう」「分かりやすく伝える」図工科の「エコメッセージ絵画」とつなげることで、発信する力を高めていった。



単元名『持続可能な加太のまち・加太の自然環境と人とのかかわり』

実践者：中山義之（和歌山市立加太小学校5年A組）

今年度は、「元気☆写真祭プロジェクト」（6月～9月）と「元気☆海洋環境プロジェクト」（9月～）に取り組んでいる。ここでは、「元気☆写真祭プロジェクト（以下、写真祭プロジェクト）」の概要を説明する。

写真祭プロジェクトは、子供たちが加太のまちで写真祭を行っている人と協働し、空き家を活用して、自分たちも写真展を行うというプロジェクトである。このプロジェクトでは、①写真を撮ること、②空き家を写真展ができるように整え、写真展を行うことが主な活動である。①では、「そっと加太らしさが伝わる写真って？」を追究し、写真を撮った。②では、「少なくとも100人を超える」という目標を立て、活動した。目標達成のためには、自分たちが写真展をやっていることをたくさんの人に知ってもらうこと、空き家までのアプローチのさみしい感じを解決することに目をむけて取り組んだ。

たくさんの人に認知してもらう方法として、加太のまちで行われている竹燈夜で宣伝する方法を、また、アプローチには自分たちが撮った写真をプリントしたTシャツを飾ることを考えた。

写真祭当日は、観光客への呼び込みを行ったり、古民家では、訪れるお客さんに尋ねられたことを答えたりした。2日目には、集まったお客さんに自分が撮った写真の中でとっておきの1枚を紹介した。3日間で約300人の来場者があり、目標を大きく超えられたことに大きな手ごたえを感じる事ができた。



単元名『レッツゴー町たんけん！～わたしたちの公園大すき！～』

実践者：早崎 大輔（和歌山市立有功東小学校2年光組）

2年生「生活科」の町たんけんの単元で、校区にある公園を教材に学習を行った。学習の主なねらいは、①六十谷の町の様々な場所を訪れ、その場所での活動や地域の人々との関わりを通して、地域の良さが分かること②友達や地域の人々と関わることを通して地域のよさを感じ、地域と共に自らの思いや願いを実現しようとする態度を養うこととした。

単元では、子ども達が公園の良いところやとっておきの遊び、お気に入りのスポット等を見つけながら公園に愛着を持ち、その公園を「より良い公園にしていこう」という思いを持って活動することを意識して学習を進めた。公園の遊具で遊び、自然を見つけ、気持ち良さを感じるなど、子ども達は全身で公園の魅力を味わった。

子ども達が「もっとこうしたい！」という思いを持ち始めたところで少し立ち止まり、自分達の思いだけではなく地域の人々にも目を向けられるようにした。公園を利用しているのは自分達だけではないという公共性の意識も育てたいと思っていたからである。そこで、地域の人々にとって公園はどんな場所なのか、どんなところが好きなのか等をインタビューで調べた。公園を管理する立場にある自治会の会長や副会長、子どもの頃からその地域で生活している人、公園の近くに住んでいる子ども達など、色々な立場の人々から子ども達は情報を集めた。

「年に一度の夏祭りが楽しみ」「毎年、春に咲く桜を見に行く」「桜の木を植えている」「小さい頃から遊んでいる」「フェンスが破れたら修理する」等々、地域の人からインタビューしたことを話し合う中で、子ども達は地域の人々も公園をととても大事にしているということに気付くことができた。

公園に対する自分たちの思いと地域の思いを確認した子ども達は、より良い公園にするための活動の一つとして、新しい公園の名前の案を3つ考えた。（もっと素敵な名前の公園にできないかな？という子どもの思いを基に）正式な決定は、自治会に委ねている。2月中旬頃に結果が出て、その後はPR活動を予定している。



単元名『ホットに行動・クールに解決！和歌山市の特産品“新生姜”を支える6風チルドレン』

実践者：中山雄一郎（和歌山市立有功東小学校6年風組）

1年間を通して、和歌山市の特産品である新生姜に着目し、この新生姜の良さをたくさんの人たちに広められるように学習を進めている。

5月中旬に、JAで働いている児玉さんの協力のもと、有功東小学校の畑に種生姜を植えて育てることとなった。しかし、どのように育てたら良いのかがあまり理解出来ていなかったため、児玉さんの紹介のもと、小豆島で新生姜を育てている小栗さんと会うこととなった。小栗さんからは、新生姜を育てているときの努力や苦勞、楽しさを教えていただき、愛情をもって育てていることにも子供たちは気付かされた。大切に育てながら、2学期からは新生姜の良さをたくさんの人たちに広められるように、有功ふれあいまつりと市高デパートに参加した。

有功ふれあいまつりでは、事前に試食用に新生姜



の佃煮とアンケートを作り、新生姜の良さをお客さんに伝える活動を行った。アンケート調査の結果から、市高デパートに向けての準備を行い、クラスで育てた新生姜と小栗さんからのご好意でいただいた新生姜を使って、佃煮とジンジャーエールを作った。その準備では、生姜専門店カフェモコの店主である松本さんと北東さんにも協力してもらい、商品を作ることができた。市高デパートでは、商品を販売しながらたくさんのお客さんに新生姜の良さを広められることができた。

2学期のまとめとして、日曜参観や5、6年生の前で活動報告を行うことができた。

単元名『みんなでつくろう！ 街中にぼくらの大好きな街を！

～村づくりから私たちの暮らしを見直そう～』

実践者：細田 和希（和歌山市立雑賀小学校4年4組）

今年の子どもたちは、学習意欲が高く、何事にも一生懸命取り組もうとする子が多くいる。そんななかで、担任には「自分たちで学びを作り上げる楽しさを実感してほしい」という思いがあった。まず、子どもたちに総合を通してどのようなことをしたいか、思いや願いを尋ねると、「みんなで協力して一つのものをつくりあげたい!」、そしてその「達成感を味わいたい」という思いが強かった。具体的な学習材についての話し合いでは、「無人島でサバイバル生活をしてみたい!」という意見に関心が集まった。これは、雑賀地区という和歌山市の中心地で生活する子どもたちが、テレビ番組等を通して自給自足のような生活にふれることで、そういった生活へのある種憧れのようなものを感じているのだと思った。そこで、昔テレビでやっていた「DASH村」をのような村づくりをしようということになった。



子どもたちがもつ村のイメージから、村にはどのようなものが必要か考え、5つのグループにわかれた。グループごとに計画を立て、実現に向けて活動を進めてきた。協力が必要な場合はクラスみんなで活動し、困った時には全体で話し合う機会をもち、みんなで意見を出し合い考えた。そのようにして、畑を開墾して野菜を育て、生き物が住む池をつくり、生活拠点となる小屋を建て、調理する窯をつくり、ヤギを3頭飼育してきた。これからは、この村をどのようにして自分たちだけの活動から、周りに広げていくかを考えていきたい。

子どもたちがもつ村のイメージから、村にはどのようなものが必要か考え、5つのグループにわかれた。グループごとに計画を立て、実現に向けて活動を進めてきた。協力が必要な場合はクラスみんなで活動し、困った時には全体で話し合う機会をもち、みんなで意見を出し合い考えた。そのようにして、畑を開墾して野菜を育て、生き物が住む池をつくり、生活拠点となる小屋を建て、調理する窯をつくり、ヤギを3頭飼育してきた。これからは、この村をどのようにして自分たちだけの活動から、周りに広げていくかを考えていきたい。

単元名『和歌浦探検に出発!』

実践者：赤松 広志（和歌山市立雑賀小学校5年4組）

和歌山市和歌浦の歴史・自然に焦点をあてて学習を展開した。学習の導入では、子ども達は和歌浦の銘菓「和歌浦せんべい」を試食し、せんべいに描かれている絵柄に興味をもった。「なぜこれらの場所が和歌浦せんべいの絵柄になっているのだろう」という課題意識のもと、各所を巡ったり、和歌浦せんべいを焼いている店を見学したりして、情報収集を行った。そして、絵柄の場所が歴史や自然といった和歌浦の魅力を感じられる名所であることに気付いた。



2学期は、和歌浦の海（主に干潟）についての探求を進めた。和歌山県の環境学習アドバイザーである平井研氏を招き、干潟について学習したり、実際に干潟に行き、生き物観察を行ったりした。その中で、和歌浦干潟で昔は潮干狩りが楽しまれていたのに、今は中止されている

ということを知り、アサリに関心が向いた。平井氏から、アサリがピーク時の6分の1まで減っていることやアサリを守るため地元の漁師や小学生が活動していること、そしてそれらがあまり知られていないという現状について教えてもらった子ども達は、これまで学習してきた和歌浦の魅力や和歌浦の海が抱える問題について知ってもらいたいと、壁新聞やリーフレットをつくり、12月1日のおもしろ環境まつりにて、来場した多くの環境に関心をもつ方達に自分達の学習を発信することができた。

単元名『日本遺産 絶景の宝庫 和歌浦の魅力を守れ！』

実践者：藪 隆政（和歌山市立雑賀小学校5年1組）

この1年間は「ひと・もの・こと」に触れる機会を多くし、自分たちのふるさとと自然への愛着を育てたいと思い学習を進めた。全く興味も知識もない和歌浦について知るために、和歌浦の名所巡り、名物の食べ歩き、アサリの潮干狩り体験をし、和歌浦について興味を持たせた。

1学期は、和歌浦のアサリを増やそうと頑張っていたり、しらすがなくならないように決まりを決めながら漁をしたりして、「和歌浦の海」を守りながら、漁をする横田さんについて考えることができた。また、水産課の加藤さんに、稚魚を放流する手伝いもさせてもらい、海の生き物を守ろうとしている大人がたくさんいることに気づくことができた。

2学期は、和歌浦の海に愛着をもたせるために、片男波遠足や地引網体験などの活動を取り入れた。また、環境学習アドバイザーの平井先生や桑田先生と一緒に何度も和歌浦干潟の生き物観察に行ったり、和歌山県立自然博物館の楫先生に話を聞きに行ったりして、「どんな生き物がいるのか？」や和歌浦干潟の生き物の特長について知ることができた。

干潟観察や釣りに行った時に、ゴミが落ちていることに気づき、「生き物を守らないといけない」と子供達が強く思うようになった。みんなに生き物を知ってもらうために、和歌浦水族館を作ろうとしていたが、自然の生き物を飼うことの難しさや、生き物にとって一番過ごしやすい場所は自然だということも理解できた。そんな自然を守ろうとしている平井先生の仕事も体験したり、何度も話を聞いたりしたことで、自然を守っていく大切さや難しさを学ぶことができた。そして、今まで学んできたことを、環境おもしろ祭りで提案することができた。



5. 成果

今年度から共同研究メンバーが3名増え、互いの切磋琢磨がより一層みられるようになった。全国レベルの実践者である石堂裕氏の講演がきっかけとなり、メンバーの周辺まで学ぶ意欲がより高まっている。石堂氏の勤務先である兵庫県たつの市立新宮小学校を訪問してその指導を真近に見て学ぶという活動も一度ならず行われた。さらに、これまでの蓄積を積極的に発信すべく、今年度は第2回石堂裕氏講演会の前半にメンバー3名による実践発表の場も設けた。また、独自の公開研究の場を持つこともでき、昨年度課題として挙げていた「授業を広く公開し、批判的に学び合うこと」「全国の優れた実践にふれること」「和歌山市・和歌山県全域へ、学び実践したことを発信する」等が少しずつ出来てきた一年であった。

新しい学習指導要領の柱となっているカリキュラムマネジメントを実践的に進める上で、この共同研究の意義は少なからぬものがある。各自の意識を更に一段高め、共同研究が和歌山の総合的な学習の時間の実践を全国に発信していく拠点になればと考えている。